

## 【曲目解説】

ベドルジフ・スメタナは、1824年3月2日にチェコのリトミシュルで、ビール醸造技師のフランティシェクの長男として生まれました。幼児からピアノとヴァイオリンを学び、6歳の時には、土地の上流階級の集まりで、オーベールの歌劇「ポルティチの啞娘」序曲をピアノで演奏して、人々を驚かせました。1843年ブラハの音楽学校に入学し、ピアノと音楽理論を本格的に学びます。ここでは、リストにも教えを受けています。当時チェコ（ボヘミア）は、ハプスブルク家の支配に属し、その政治的抑圧や宗教的迫害が、人々の民族意識を呼び覚まし、ボヘミアの民族文化を守り、オーストリアの圧制から脱しようとする運動が高まっていました。スメタナも、その音楽に、ボヘミアの民族音楽や文化に根ざした素材を多く採り入れています。歌劇「売られた花嫁」もボヘミアの農民の生活に取材したカール・サビナの脚本による3幕の喜歌劇です。これは、1866年に作曲され、スメタナが作曲した国民歌劇の最初の成功作となりました。序曲は、全奏で華やかに力強く始められます。そしてすぐに第2ヴァイオリンだけで疾走するようなフレーズが最弱音で奏されていきます。そこから少しずつ楽器が増え、再び全楽器による最強奏に至る部分は実に印象的です。彼は、ベートーフェンと同じように、後年耳の病気から聴覚を失うに至りますが、その後も作曲を続け、あの有名な「モルダウ」を含む6曲の連作交響詩「わが祖国」を作曲し、チェコ国民楽派の父と称されます。

アンリ・ヴェータンは、1820年2月17日にヴェルヴィエで生まれた、ベルギーのヴァイオリン奏者・作曲家です。楽器製造と調律で生計を立てていた父の手ほどきを受け、既に6歳で（彼も！）公開演奏を行い、1827年（7歳）の演奏旅行でベリオに認められ、1831年まで彼に師事しました。その後絶え間なく演奏旅行を行い、1834年には、ウィーンで、当時忘れられていた（！）ベートーフェンのヴァイオリン協奏曲を演奏しています。各地でシュポーア、モリック、パガニーニらの名手に接して多くを学び、またウィーンではゼヒターに、パリではレイハに作曲を学んでいます。1873年に脳卒中で左半身不随になり、演奏は引退を余儀なくされますが、小康を得て作曲は続けました。1881年6月6日、女婿が経営するアルジェリア、ムスタファの療養所で亡くなりました。作曲家としては、合唱と管弦楽のための「序曲とベルギー国歌」を除けば、全て弦楽器のための作品です。今日演奏する第5協奏曲の他、ベルリオーズが「独奏ヴァイオリン付きの壮大な交響曲」と呼んだ4楽章形式の第4番のヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリンと管弦楽のための「ファンタジア・アパッショナータ」などがよく知られています。ヴァイオリン協奏曲第5番は、一応三つの部分からなりますが、切れ目なく演奏される1楽章形式で、幻想曲風な味わいがあります。ヴァイオリンの音色、技巧がたっぷり楽しめる作品となっています。

ベートーフェン（1770・12・16～1827・3・26）の第7交響曲は、1813年の末、第8交響曲とともにウィーンで初演され、絶賛を博しました。ベートーフェンの名は、「ウィーンの栄光」と称えられ、第2楽章（いわゆる「不滅のアレグレット」）は、熱狂的な歓呼に呼応してアンコールされました。ワーグナーは、この曲を「舞踏の神化」と評しましたが、確かにこの交響曲では「リズム」が重要な要素で、「リズムの権化」とも呼ばれます。また、「ディオニソス的」と言われ、その沸騰するようなエネルギーには目を見張るものがあります。しかしながら、その作りはよく練られ、細部に驚くべき緻密さを持っています。第2ヴァイオリンやヴィオラ（内声部）の動きにベートーフェンの仕上げの妙味が感じられます。